



紹介者

大野 誠

インテル
取締役社長



樋口 泰行

パナソニック コネクト
取締役執行役員 プレジデント・CEO

「あるべき自分」と「ありたい自分」

幸せを追求するということを考えたときに、その追求の仕方において、人間には大雑把に分けて二つのタイプがあるという。

一つは、将来の幸せをつかむために、苦しい思いをしてでも今を頑張るタイプ。例えば、スポーツで頑張ってオリンピックで金メダルを取るという目標に向かって、厳しい練習に耐えて頑張る。会社を起業して、ビジネスを立ち上げ、上場をして経済的にも豊かになるために、寝食を忘れて、血のにじむような努力をするタイプ。

もう一つは、将来のことは気にせず、目の前の幸せを最優先するタイプ。刹那主義的に、今幸せであればそれが一番良いというタイプ。

また、その両方をうまくバランスさせる人もいるでしょう。あるいは、年齢を重ねるほどに、目の前の幸せを追求する度合いが、将来のために今頑張る度合いよりも増えるかもしれませんし、そもそも幸せの定義も変わってくるかもしれません。

このことと似ているかもしれませんが、自分は、若いときから、「あるべき自分」と「ありたい自分」の間で、挟まれて悩んできたような気がします。昭和の時代の学校教育や、親の価値観が影響しているのかもしれませんが、自然体でいる自分よりも、「こうあるべき」という自分の姿が、自分とは関係ないところで形成され、そうなるべきという力が勝ってきたような気がします。その状態を今の年齢まで引っ張ってきて、それがために、結果として、幸せ感が感じられない自分になってしまったような。

これからの人生を迷いなく生き抜くために、今思っている幸せの定義に照らし合わせて、ありたい自分を追求し、そして、それが社会的にも意義がある姿ってどんな姿なのか、考えてみたいなんて思う、今日この頃です。

▶▶ 次回リレートーク

井上 ゆかり

日本ケロッグ
代表職務執行者社長